



「Trichomonas と喰食作用」

院長 西田 敬

女性の掻痒症の有触れた元凶が忙しく蠢いて見付けた酵母菌を喰らう様子、トリコモナスの旺盛なる喰食作用 (phagocytosis) を活寫した、一連の綺麗な走査型電子顕微鏡写真 (Antonio Pereina-Neves and Mariene Benchimol, Cell Biol 99: 87-101, 2007) が嘗って、注目を集めた事がある。発表当時から感嘆しきりで、一世を風靡したものだ。

止せば良いのに、医者ドイツ語は生半可の代名詞として夙に非難と揶揄の的。まさか間違っても、胎生哺乳類 (mammalian viviparity) を以て進化の頂点とは、考えるだに烏滸がましいが、其と一般で、命賭の選択の結果、辿り着いた生存形態の一つに過ぎぬ。底う様だが、半可通な独逸語も生活の方便と思えば御寛恕を戴ける歟。

鮫や、鱧は卵胎生 (ovoviviparity) で、一部では母の胎内で同胞を共喰いし乍でも育つと云う。間違いの無いところ、彼らは胎内での分泌

物を糧として (histiotroph)、体表から吸収する。即ち、彼らの栄養外胚葉 (trophoectoderm) は喰食能を保持している。胎生哺乳類の哺育は母親からの胎盤循環と母乳栄養で事足りると理解して居るなら、これも半可通。直径25 μ にも満たない卵細胞は顆粒膜細胞が分泌する卵胞液に塗れて排卵直前とも為れば、Graaf卵胞内で直径0.1~0.2mm、減数分裂を重ね乍も受精可能な配偶子にまで育ち、なんと直径は8,000倍にもsize upしている。偏に顆粒膜細胞からの分泌液、即ち卵胞液からの養分摂取 (histiotroph) の賜物。この時期、ヒトの子も鮫や鱧の末孫と何ら変りはない。人間と鮫が此塵に近いとは、流石のCarl von Linnéが著した分類の壁も案外に脆い処が在るの乎。

こうなると胎生を標榜しては居るものの、成長期を通じて其のみで購っては居ない。ヒトの卵細胞は卵黄が欠如するyolk-less eggだが、時期に由っては鮫肌やトリコモナス被覆上皮のphagocytosisを模し乍育つ。酸素毒を含有する胎盤循環の利用を焦っちゃならぬ。それには器官形成期が粗方終了した後で、manganese superoxide dismutaseなど有害酸素のscavenging enzyme (清掃処理酵素) の完備を要する。Histiotrophに始まった胎児の栄養獲得はHemotrophへ移行し、最後に亦Histiotrophへの帰還ですな。馬鹿なっ！最後は自分の呼吸器、消化管を使う。消化吸収と仰い、消化と！出生後に母乳栄養を享受できる哺乳類を名乗るまでの道程はまだ未だである。「ローマは一日にして成らず」を、図らずも茲に見る。

